

「みんな、ここを通った」 ～戦争・交易・巡礼から見るヒマラヤ交易路の盛衰史～

企画責任者：小松原ゆり（明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員）

アドバイザー：別所裕介（駒澤大学 総合教育研究部 准教授）

日時：2022年2月12日（土曜日）13:00～18:00

オンラインにて開催

【プログラム】

13:00～13:15 オープニング

フィールドネットからの挨拶：吉田ゆか子（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授）

開会の挨拶・趣旨説明：小松原ゆり、別所裕介

13:15～13:40 報告1：小松原ゆり（明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員）

「戦争とヒマラヤ交易路：チベット、ネパール、清朝関係を中心に」

13:40～14:05 報告2：井内真帆（京都大学 白眉センター 特定准教授）

「後伝初期のロツァワとパンディタの往来について」

14:05～14:30 報告3：別所裕介（駒澤大学 総合教育研究部 准教授）

「交易路の幹線性と宗教関係ネットワーク——ネパール・ヒマラヤのチベット仏教圏形成をめぐる」

14:30～14:45 質疑応答

14:45～14:55 休憩

14:55～15:20 報告4：渡辺和之（阪南大学 国際観光学部 准教授）

「ヒマラヤ家畜回廊——祭礼に伴うネパールを中心とした畜産物の流通と広域経済」

15:20～15:45 報告5：海老原志穂（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 日本学術振興会特別研究員）

「チベット=ビルマ系言語における「馬」を表す単語をめぐる」

15:45～16:10 報告6：小林亮介（九州大学大学院 比較社会文化研究院 准教授）

「20世紀前半におけるチベットーインド交易の展開とカリンポン」

16:10～16:25 質疑応答

16:25～16:35 休憩

16:35～16:55 コメント1：大川謙作（日本大学 文理学部 教授）

16:55～17:15 コメント2：貞兼綾子（ランタンプラン代表）

17:15～17:50 総合討論

17:50～18:00 閉会の挨拶：小松原ゆり、別所裕介

【実施報告】

1. 本企画の目的

本企画において議論の焦点となるキロンーラスワ道路は、古来よりカトマンズ盆地と西チベットのキロン地方を繋ぐ幹線路として、平時にはキャラバンや巡礼者が往来し、有事には軍用路として機能してきた。ネパールの歴代王朝にとって、チベットーインド間の中継交易による利潤を左右するこの道路の支配権の有無は死活問題であり、チベットおよび清朝との三度の戦争を潜り抜けたグルカ朝の覇権を支えたのもこの道である。しかし20世紀以降は、シッキムに近代的通商路が開通してチベットーインド間の直接交易が可能となり、さらに中印国境紛争後は、ラスワの東側に位置するコダリ経由の中尼公路が開通したことで、多国間交易の主軸は完全にラスワを離れた。だが今世紀に入ると、この古道は再び脚光を浴びた。南アジアへの経済進出を強める中国は、2012年キロンーラスワ間に高規格道路を敷設し、翌年には「一带一路」の枠組みの中で、ラサーカトマンズ間を結ぶチベット鉄道がラスワ経由で敷設されることが公表されたのである。さらに2015年のネパール大地震で中尼公路が壊滅すると、物流のみならず観光もラスワに一本化されたことで、キロンーラスワ道路はにわかに国際通商路としての幹線的機能（これを「幹線性」と名付ける）を取り戻し、中国の対南アジア戦略の鍵を握る重要インフラとして、内外の関心を呼んでいる。

以上の史変遷を踏まえながら、本企画では、このキロンーラスワ道路と沿道の地域に着目し、異国家間の駆け引きの中で超地域的に形成される「幹線性」が、異なる地域の物産や知識・技術を繋ぎ合わせる交易路本来のローカルな日常的機能と、ヒマラヤの南北で具体的にどのような絡み合いを見せてきたのかについて、学際的な議論を深めることを目的とし、**狙い**として以下の**三点**を挙げた。

第一に、ヒマラヤ交易路を事例に、内陸アジアにおけるローカルな道路インフラの重要性を、学際的かつ史的アプローチにより多角的に照らし出す。

第二に、ヒマラヤの南北を結ぶ日常の交易路が生み出すローカルな機能と、国家間のマクロな駆け引きのなかで形成される幹線的な機能の交差を焦点化する。

第三に、「一带一路」を掲げる現代中国の台頭が、ヒマラヤ交易路の力関係にどのような変動をもたらしていくのかを、インフラ開発の現場において、前近代からの連続性という長期的なスパンで見定める。

以上の三つの狙いを踏まえたうえで、次のような報告・討議を行った。

2. 報告・コメント内容

まず前半の三名（小松原、井内、別所）の報告者は、多国間関係の中で推移してきた交易路の「幹線性」について、軍事および宗教交流を事例に史変遷の視点から考察を行った。以下に要旨を挙げる。

(1) 小松原ゆり (明治大学 研究・知財戦略機構 研究推進員)

「戦争とヒマラヤ交易路：チベット、ネパール、清朝関係を中心に」

チベットのキロンからラスワ経由でカトマンズ盆地へ続く交易路は、古来よりチベット・ネパール間二大交易路のひとつであり、交易商人や巡礼者、戦時には軍隊がこの道を往来した。18世紀後半の第二次グルカ戦争においても、清朝軍はこの道を通ってネパールまで遠征している。本報告では、この戦争において同路が果たした役割の戦前・戦中・戦後を検討した。戦前、グルカ朝のネパールにおける覇権確立とチベットとの戦争は、対チベット交易における膨大な利益を背景としたラスワルートの支配が鍵となった。戦中、清朝軍のネパール遠征によって、清朝がネパール側ルートを掌握したこと、漢文史料の地名から、当時ラスワ地域がネパール文化圏になかったことが明らかになった。道中の絵画や詩も作成されている。戦後、グルカ朝は清朝へ朝貢を開始したが、使節団が往来したのもこのラスワルートであった。この交易路は、三者交流の主路であったといえることができる。

(2) 井内真帆 (京都大学 白眉センター 特定准教授)

「後伝初期のロツァワとパンディタの往来について」

チベットへの仏教伝播の後伝初期の時代は、チベットにインド仏教を取り入れるため、王たちが施主となって経典の翻訳が行われ、またインドやカシミールとの人的交流も盛んであった。インド人パンディタ (大学者) のアティシャ (Atiśa, 982–1054) やチベット人ロツァワ (翻訳師) のゴク・ロデンシェーラブ (Rngog Blo Idan shes rab, 1059–1109) をはじめとして多くの人々が往来したが、彼らを通ったのがキロンであった。また、12世紀末のイスラム勢力の拡大によるインド仏教消滅の時期に、ドルジェデン (rdo rje gdan ブッダガヤー) を目指したチベット人ロツァワたちも多くいた。彼らはインド仏教の最後の目撃者となると同時に、インド仏教の重要な寺院で座主を務めるなどし、この時期に独特の存在感を示していた。彼らを通ったのもこのキロン・ラスワ間であり、後伝初期においてもこの道は重要なルートであった。

(3) 別所裕介 (駒澤大学 総合教育研究部 准教授)

「交易路の幹線性と宗教関係ネットワーク——ネパール・ヒマラヤのチベット仏教圏形成を巡って」

本報告では、18世紀以来のキロンーラスワ道路を介したヒマラヤ南北の越境型宗教交流について、「宗教関係ネットワーク」の視点から考察を行った。ここでいう「宗教関係ネットワーク」とは、チベット本土から「より正統性の高い仏教」を取り込むための、ヒマラヤ地域社会側に備わった仏教土着化の仕組みである。①師弟関係、②血縁関係、③転生系譜、の3つの回路を基軸とするこの仕組みは、インド亜大陸で仏教が駆逐されて以降、近代国家によって国境が画定されるまでの間、主にヒマラヤ南北を跨いで精力的に活動した「テルトン」と呼ばれる遍歴遊行者によって維持され、ヒマラヤ山中にローカルな仏教

圏を形成するための重要な紐帯を生み出してきた。発表では、18世紀の西チベットにおける拠点僧院を中心に、ラスワ街道を經由してヒマラヤ山域で独自の秘儀的な活動を行ってきたテルトンの系譜が、19～20世紀の国民国家の時代に一旦衰退した後、21世紀の新たな社会動態の元で部分的に再生されている実状を、具体的な現地調査のデータをもとに提起した。

後半の報告者のうち、**渡辺**と**海老原**の二名は、ヒマラヤの南北を結ぶ交易路の機能について、主に家畜交易の視点から、現地調査に基づく具体的な事例を提示した。そして最後に**小林**が、再び史の変遷の見地から、近現代のチベット・イギリス・中国関係とヒマラヤ交易の変遷を論じた。以下に要旨をまとめる。

(4) 渡辺和之 (阪南大学 国際観光学部 准教授)

「ヒマラヤ家畜回廊：祭礼に伴うネパールを中心とした畜産物の流通と広域経済」

ヒマラヤでは、祭礼での供犠に伴い、畜産物の交易がおこなわれることがある。このような家畜の交易のことを、発表者はヒマラヤの家畜回廊と名付け、調査している。発表では、ヒンドゥー教の大祭ダサインの際、チベットからネパールへ運ばれるチャングラ山羊の流通を明らかにした。ラスワ街道では、ラスワ郡のタマン族がチャングラ山羊の交易を行うが、需要に比して供給が少ないため、徒歩で沿道を移動する間に次々と買い手が付き、カトマンズへ着くまでに完売してしまう。また、カトマンズで売買されるチャングラ山羊は、ムスタン経由でトラックにて運ばれたものである。コダリ街道閉鎖後も、チャングラ山羊に関しては、ラスワ街道は昔ながらの脇街道であることが明らかになった。

(5) 海老原志穂 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 日本学術振興会 特別研究員)

「チベット=ビルマ系言語における馬を表す単語をめぐって」

本発表では、古代と前近代において交易、通信、軍事、宗教活動において重要な役割を果たしていた「馬」を表す単語を、800地点を超えるチベット=ビルマ系言語のデータをもとに地理言語学的な観点から分析・考察を行った。チベット=ビルマ系言語の「馬」を表す単語の語形を整理すると、4つの主要な語形がみられる。タイプA (m-raŋ)、タイプB (rta)、タイプC (ghoḍā)、タイプD (k-sre)である。A、Bはチベット・ビルマ祖語に由来し、C、Dはそれぞれインド・アリア語群、オーストロアジア語族からの借用である。このうち、Bはチベット諸語全域の他、チベット語圏周辺のチベット語の影響を強く受けた言語に分布すること、AはBの分布の周辺にみられること、Cは北東インドおよび中央ネパール、Dはカレン諸語に分布していることがわかった。考察としては、4つの語形の通時的な順序が「A > B > C、D」となることのほか、4語形のうち2つが借用であることや、他の動物と比較して語形の分岐が少ない点については馬の長距離移動との関

連性を述べた。また、B がチベット諸語の中核語（メルクマール）として機能している先行研究をふまえ、チベット帝国の拡大とともに B の語形が広域に広まった可能性を指摘した。

（6）小林亮介（九州大学 比較社会文化研究院 准教授）

「20 世紀前半におけるチベットーインド交易の展開とカリンポン」

19 世紀後半以降、英領インドにより開拓されたシッキム・ルートは、ネパール経由に代わるチベットーインド間の新たな幹線ルートとして発展したことが知られている。従来、このシッキム・ルートを通じたイギリスのチベットに対する経済進出については、その軍事力を背景とした帝国主義的側面が強調されることが多かった。しかし、イギリスの進出にともない、チベット産羊毛が南アジア経由で世界市場へと販路を拡大し、チベット在来の商業ネットワークが活性化したという側面があったことも事実である。カリンポンはこうしたチベットーインド間におけるヒト・モノ・カネ・情報の流れの結節点であるとともに、チベットと西洋近代の邂逅の場でもあった。新たな商業機会を掴み、カリンポンに拠点を築いたカム出身の商家の人々は、それまでラサの政治を掌握してきた貴族や僧侶たちに次ぐ新興勢力として実力をつけ、チベットの政治・経済・対外関係などにおいて重要な役割を果たしていった。チベット・中国・インド・イギリスなど多様な勢力や文化圏の交流とせめぎ合いの前線を生きた彼らの歴史は、多くの興味深い論点を含むものであり、さらなる検討が必要になるだろう。

続いて、現代チベット史に精通する社会人類学者の大川謙作（日本大学 文理学部 教授）、および現地で草の根 NGO を運営する貞兼綾子（ランタンプラン代表）の二名が、全体的なコメントを提起し、総合討論を行った。

大川は、カール・マルクスにおける「交通」の概念を取り挙げ、ヒマラヤ南北の根本的な相違に根差した「価値の交換体系」としての交通の発生を指摘した。そのようなプロトタイプの交通が、社会的・経済的に発展していく一方で、発展軌道からむしろ意図的に外れることにより、近代的な辺境統合運動の現れとしての文化資源の出現や観光開発が促進されること、さらには地域接続の回路としての「ヒマラヤ」が開閉することによって、文化のダイナミズムが生じるという視点を提言した。貞兼は、40 年近くにおよぶラスワ地区の変遷について、エポックを画する出来事（同地開発の端緒となったインド主導の鉱山開発、ネパール政府による国立公園化、中国による近年の国境管理強化、2015 年のネパール大震災）を丁寧に整理しながら解説した。これら圧倒的な変化をもたらす諸力（なかでも大地震は決定的なコミュニティの危機をもたらした）に対して、なおもチベット仏教信仰に基づいた価値観を根強く保持し、牧畜に傾斜した生業体系を変容させながらしなやかに生き抜く現地住民＝路傍の生活者のミクロな営みを示した。

3. 成果と今後への課題

以上の個別報告・コメントの後に総合討論を行い、冒頭に示した三つの狙いについて、以下の成果をあげることができた。

多分野にわたる学際的な見地から、ヒマラヤ交易路の歴史的盛衰と社会的機能を集約的に検討することで、辺境社会の近代化をめぐる行われがちな単純な開発礼賛や、その対極をなす伝統社会偏重論などの近視眼的な議論を退けつつ、多国間の複雑な権力関係の渦中に置かれたヒマラヤ国境地帯に対する多角的な理解への第一歩を提示した。特にキロンーラスワ道路の「幹線性」を仏教という視点から考察し、中世までの仏教流伝に伴う「南から北」(インド→ヒマラヤ→チベット)というベクトルが、インド亜大陸における仏教滅亡以降、チベット仏教の成熟と中央チベットで政教一致の集権的政権が確立されるなかで、少しずつ「北から南」(チベット→ヒマラヤ地域)へと切り替わったことを可視的に明示することができた。さらには、その背景に存在する、宗教者の越境移動、家畜のやりとりを含む多様な交易、地域覇権にともなう人物移動など、さまざまなモビリティに支えられた社会関係を、具体的に提示することができたのは大きな成果である。

その一方で、今後の課題として、近代から近現代にかけての領域主権概念に基づく国境の管理とローカルな交易路の複雑な媒介関係については、ヒマラヤの「南-北」関係だけではなく、小林発表が指摘した「東-西」にわたる幹線路の時代的遷移に着目した捉え直しが必要であることが浮き彫りになった。そのためには、西洋型「ネイション」の概念が内陸アジアに導入された20世紀初頭のマクロな政治・経済状況を視野に収めながら、「路傍の生活者」の目線に基づいたミクロな現地資料を、綿密なフィールドワークを通じて収集していくことが不可欠である。加えて、「主街道」「脇街道」という二重交易路のあり方や、チベットの中世と近現代を繋ぐ近世の実情についても、文献および現地調査の両面から掘り下げていく必要がある。

中国政府が「一帯一路」を始動して以来、ラスワ地域は、欧米に拠点を置く国際的研究プロジェクトの注目の的となっている。しかしそれらの関心の主軸は、中国の「一帯一路」を念頭に置いた地域経済の短期的変動にある。また、中国が南アジアで進める開発案件の成否は、海を隔てて同国と接する我国にとっても重要な示唆を提起するものであるが、ともすれば安易な中国脅威論の台頭により、実証的な現地研究に基づく視点、特に「陸のシルクロード」の成否については、知見の形成が立ち遅れている。本企画のように、長期的な視座をベースに置き、ヒマラヤの交易路をめぐる幹線性の変遷を、ローカルな具体的事象とつなぎ合わせて検討する新たな「ボーダースタディーズ」が必要とされる時代なのである。今後も、引き続きキロンーラスワ道路を主軸に置きながら、史的変遷を踏まえた実証的な現地研究を積み重ねた学際的なアプローチの下で、上述の現状に有効な一石を投じていきたい。